

ろくべん館だより Vol.36

『鹿食と諏訪大社』

ひさしぶりに行った諏訪大社上社にて、『鹿食免(かじきめん)』なるお札を求めてみた。決して好んで鹿肉を食べたいわけではないが、昨今のジビエブームに符号した面白さもあって興味をそそられたのである。

『鹿食免』は、肉食を禁忌していた時代でも、鹿を神前に奉納し食することを古来続けてきた諏訪地方で、諏訪大社が江戸時代に発行した鹿あるいは四つ足の動物を食べることを許可する御符である。札を収めた袋には「諏訪の勘文」という文言が書かれていた。

「業尽有情 ごうじんのうじょう 雖放不生 はなつといえどもいきず 故宿人身 ゆえにじんしんにやどりて 同証佛果 おなじくぶつかをしょうせよ ー 前世の因縁で宿業の尽きた生物は 放ってやっても長くは生きられない定めにある したがって人間の身に入って死んでこそ 人と同化して成仏することができる」と、なんだか人間の勝手な言い訳に聞こえなくもないのだが、むしろどうか成仏しておくれという願いのようにも思える。「殺生は罪悪として狩猟を忌み嫌う時代にも、お諏訪さまから神符を授かった者は、生きるために鹿肉を食べることを許されました。こうした信仰により諏訪の人々は、長く厳しい冬を乗り越えてきたのです」という説明を読んで、なるほどと頷けた。

諏訪大社には、農耕・狩猟に関する特殊な祭事が数多く伝わっている。先に挙げた鹿を奉納する祭り『御頭祭(おんとうさい)』は、上社で最も重要な祭事とされ、狩猟の性格の顕著な祭りである。江戸時代に菅江真澄が記した紀行文の中に、75頭の鹿の頭が神前に並べられたところが描写されている。神前の供物はほかにも白兔の串刺し、白鷺、雉、鮎、鯉、焼いた獣の皮、鹿の脳を調理した「脳和え」などが並べられた。御頭祭は、自然界に宿る精霊であるミシャグジ神を降ろし、土地の豊饒を約束してもらい、その御礼として禽獣魚介が献じられたものらしい。なんともダイナミックなそして不思議な祭りである。(現在では、神前に供えられる鹿の頭部は剥製)

75頭もの鹿の頭は諏訪周辺の各地から集められたもので、その昔は遠州の千頭せんずの方からも遠山谷からも集められたそう。これらの輸送は、「諏訪明神行き」という旗を付けて路上に置いておくと、通行人が自分の行く先まで運んで行く「村送り」という方法で届けられた。これも諏訪明神の威力と、諏訪文化の及ぶ範囲が今日認識されるよりはるかに広がったことを物語る話のひとつであろう。

かつて鹿塩の葦原神社にも、鹿の頭を神社に奉納する風習は伝わっていたらしい。猟の願かけをした人が鹿を射止めると、2本の角に注連縄を張り、これにカイダレを下げて飾った頭を神前に供した。神前に捧げたのちは、所望する人が自由に貰いさげてよいことになっていたそう。

ここでついでに諏訪と鹿塩の関わりにも少し触れてみよう。『大鹿村誌』に梨原家文書か

ら引用された葦原神社の由緒が載っている。葦原神社は明治5年に中峰・沢井・入沢井・北入・北川にあった5社が梨原の諏訪神社に合祀され葦原神社と改称された。もともとの梨原諏訪神社は諏訪本社（もとやしろ）といわれ、建御名方命が諏訪の地に行く前にここに行宮を建てたことに因るのだそうだ。御柱祭には「鹿塩棧敷」が設けられたと書かれているが、これは諏訪では伝えられていない。諏訪市博物館に問い合わせたことがあるのだが、棧敷の設けられた祭りというは御射山祭という御狩り神事だったのではないかと教えられた。御柱祭の見物棧敷としては「殿様棧敷」「高遠棧敷」というのが資料に残っているという。はたして「鹿塩棧敷」が設けられるには、どんな貢献をしたものであろうか。

他にも旱天のときの雨乞いには、諏訪大社から「御天水」をもらってきた話が残っている。神社の宝殿からは晴天の日でも不思議なことに必ず水滴が落ちる。これを竹筒に入れ持ち帰る。これには男2人で出かけて行き、その日のうちに戻る。途中で止まると、そこで雨が降るとされた。村まで持ち帰ると葦原神社で祭りをし、御天水をあけると必ず雨が降ったと伝えられている。

諏訪の歴史は古く、石器時代から人類が足跡を遺し、自然を崇めるその信仰の歴史も深い。自然の恵みに感謝し、そして荒れ狂う自然を畏怖した。自然は神そのものだった。鹿食免に話を戻そう。今日「鹿」は害獣として駆除される。長野県内で1万頭以上の鹿が捕獲されても、食肉用に回されるのはその10%にも満たない。ほとんどは猟師が自家消費するか土に埋められる。生きるために殺生し鹿を食してきた時代とは、自然界の生態系も大きく変化したとともに、鹿肉を食べる意味も違ってきたようだ。それでも「食す」という行為の前には必ず「屠る」という行為がある。命をいただくことには、今昔の違いはないはず。人もまた自然界に生かされている存在であることは忘れずにいたいものである。鹿食免の札には、肉食の免罪を与えられるより、謙虚であれと人間の姿勢を正されているような気がするのだが。

業
尽
有
情
雖
放
不
生
故
宿
人
身
同
証
佛
果